

竹取物語

和田萬吉

青空文庫

むかし、いつの頃ころでありましたか、竹取りたけとの翁おきなといふ人ひとがあり
 ました。ほんとうの名なは讃岐さぬきの造麻呂みやつこまろといふのでしたが、毎まいに
 日ちのように野山のやまの竹藪たけやぶにはひつて、竹たけを切り取とつて、いろ／
 々の物ものをつく、それを商あきなふことにしてゐましたので、俗ぞくに竹取り
 の翁おきなといふ名なで通とほつてゐました。ある日ひ、いつものように竹藪たけやぶ
 に入り込こんで見みますと、一いつ本ぽ妙めうに光ひかる竹たけの幹みきがありました。不ふ
 思議しぎに思おもつて近寄ちかよつて、そつと切きつて見みると、その切きつた筒つゝの中なか
 に高たかさ三さん寸さんばかりの美うつくしい女をんなの子こがゐりました。いつも見慣みなれて
 ゐる藪やぶの竹たけの中なかにゐる人ひとですから、きつと、天てんが我わが子ことして與あた
 へてくれたものであらうと考かんがへて、その子こを手ての上うへに載のせて持もち

に、いよく心を入れて養やしなひました。大きおほくなるにしたがつて少を
 女とめの顔かほかたちはますく麗うるはしくなり、とてもこの世界せかいにないくら
 るなばかりか、家いへの中なかが隅すみから隅すみまで光ひかり輝かがきました。翁おきなにはこ
 の子こを見るみのが何なによりの薬くすりで、また何なによりの慰なぐさみでした。その間あひだ
 に相あひかは變かはらず竹たけを取とつては、黄おうごん金ごんを手てに入れいれましたので、遂つひに
 は大たいした身しん代だいになつて、家いへ屋やしき敷敷も大おほきく構かまへ、召めし使つかひなど
 もたくさん置おいて、世せけん間間から敬うやまはれるようになりました。さて、
 これまでつい少をとめ女なの名なをつけることを忘わすれてゐましたが、もう大おほ
 きくなつて名なのないのも變へんだと氣きづいて、いゝ名なづけ親おやを頼たのんで
 名なをつけて貰もらひました。その名なは嫺な竹なの赫かぐや映や姫ひめといふのでし
 た。その頃ころの習ならは慣しにしたがつて、三みつ日かの間あひだ、大だい宴えん會かいを開ひらいて、

近所の人たちや、その他、多くの男女をよんで祝ひました。

この美しい少女の評判が高くなつたので、世間の男たちは

妻に貰ひたい、又見るだけでも見ておきたいと思つて、家の近く

に来て、すき間のようなどころから覗かうとしましたが、どうし

ても姿を見ることが出来ません。せめて家の人に逢つて、ものを

いはうとしても、それさへ取り合つてくれぬ始末で、人々

いよく氣を揉んで騒ぐのでした。そのうちで、夜も晝もぶつ通

しに家の側を離れずに、どうかして赫映姫に逢つて志を見せ

ようと思ふ熱心家が五人ありました。みな位の高い身分の尊い

方で、一人は石造皇子、一人は車持皇子、一人は右大

臣阿倍御主人、一人は大納言大伴御行、一人は中納言

石上麻呂いそのかみのまろでありました。この人たちは思ひおもくひとに手だてをめ

ぐらして姫ひめを手てに入れようとしたが、誰もたれ成功せいこうしませんで

した。翁おきなもあまりのことに思おもつて、ある時とき、姫ひめに向むかつて、

「たゞの人ひとでないとはいひながら、今日けふまで養やしなひ育そだてたわしを親おや

と思おもつて、わしのいふことをきいて貰もらひたい」

と、前置まへおきして、

「わしは七しち十じゆうの阪さかを越こして、もういつ命いのちが終をはるかわからぬ。

今いまのうちによい婿むこをとつて、心こころ残りのこのないようにして置おきた

い。姫ひめを一いつしよう懸けん命めいに思おもつてゐる方かたがこんなにたくさんある

のだから、このうちから心こころになつた人ひとを選えらんではどうだらう」

と、いひますと、姫ひめは案外あんがいの顔かほをして答こたへ澁しぶつてゐましたが、

おも
思ひ切つて、

「私わたしの思おもひどほりの深ふかい志こころざしを見みせた方かたでなくては、夫をつとと定めさだめるこ

とは出で来きません。それは大たいしてむづかしいことでもありません。

五人ごにんの方かた々々に私わたしの欲ほしいと思おもふ物ものを註ちゆうもん文もんして、それを間ま

違ちがひなく持もつて來きて下くださる方かたにお仕つかへすることに致いたしませう」

と、いひました。翁おきなも少すこし安あん心しんして、例れいの五ご人にんの人ひとたちの集あつま

つてゐるところに行いつて、そのことを告つげますと、みな異い存ぞんのあ

らうはずがありませんから、すぐ承しょう知ちしました。ところが姫ひめ

の註ちゆうもん文もんといふのはなかくむづかしいことでした。それは五ご

人にんとも別べつ々くで、石いし造つく皇りの子みこには天てん竺じくにある佛ほとけの御み石いしの鉢はち、

車くら持もち皇のみこ子みこには東とう海かいの蓬ほう萊らい山さんにある銀ぎんの根ね、金きんの莖くき、白しら玉たま

の實みをもつた木の枝えだ一本いつぽん、阿倍あべの右大臣うだいじんには唐土もろこしにある火ひ鼠ねずみの皮衣かはごろも、大伴おほともの大納言だいなごんには龍たつの首くびについてある五色ごしきの玉たま、石上いそのかみの中納言ちゆうなごんには燕つばめのもつてゐる子安貝こやすがひひと一つといふのであります。そこで翁おきなはいひました。

「それはなかくの難題なんだいだ。そんなことは申まをされない」

しかし、姫ひめは、

「たいしてむづかしいことではありません」と、いひ切きつて平氣へいきでをります。翁おきなは仕方しかたなしに姫ひめの註文ちゆうもん通りどほを傳つたへますと、みなあきれかへつて家いへへ引き取りひとしました。

それでも、どうにかして赫映姫かくやひめを自分じぶんの妻つまにしようと思かくご悟ごした五人ごにんは、それ／＼いろいろの工夫くふうをして註文ちゆうもんの品しなを見みつ

けようとししました。

第一だいいちばん番に、石造皇子いしつくりのみこはずるい方ほうに才さいのあつた方かたですから、

註文ちゆうもんの佛ほとけの御石みいしの鉢はちを取りとに天竺てんじくへ行いつたように見みせかけ

て、三年さんねんばかりたつて、大和やまとの國くにのある山寺やまでらの賓頭びんずるさま廬まへ様の前

に置おいてある石いしの鉢はちの眞ま黒くろに煤すすけたのを、もつたいらしく錦にしきの

袋ふくろに入れて姫ひめのもとにさし出だしました。ところが、立派りっぱな光ひかりのあ

るはずの鉢はちに螢ほたるび火ひほどの光ひかりもないので、すぐちゆうもんに註文ちゆうもん文ぶんちがひ

といつて跳はねつけられてしまひました。

第二だいにばん番に、車持くらもち皇子のみこは、蓬菜ほうらいの玉たまの枝えだを取りとに行くゆとい

ひふらして船出ふなでをするにはしまひましたが、實じつは三日みつかめ目にこつそりと

歸かへつて、かね／＼たくんで置おいた通とほり、上じようず手の玉職たましよくにん人を

おほめ多く召し寄せて、ひそかに註文に似た玉の枝を作らせて、姫のところを持つて行きました。翁も姫もその細工の立派なのに驚いてゐますと、そこへ運わるく玉職人の親方がやつて来て、千日あまりも骨折つて作つたのに、まだ細工賃を下さるといふ御沙汰がないと、苦情を持ち込みましたので、まやかしものといふことがわかつて、これも忽ち突つ返され、皇子は大恥をかいて引きさがりました。

第三番の阿倍の右大臣は財産家でしたから、あまり悪くすくは巧まず、ちようど、その年に日本に來た唐船に逃へて、その商人は、やうくのことで元は天竺にあつたのを求

めたといふ手紙を添へて、皮衣らしいものを送り、前に預つた代金の不足を請求して來ました。大臣は喜んで品物を見ると、皮衣は紺青色で毛のさきは黄金色をしてゐます。これならば姫の氣に入るに違ひない、きつと自分は姫のお婿さんになれるだらうなどと考へて、大めかしにめかし込んで出かけました。姫も一時は本物かと思つて内々心配しましたが、火に焼けないはずだから、試して見ようといふので、火をつけさせて見ると、一たまりもなくめらくと焼きました。そこで右大臣もすっかり當てが外れました。

よぼん 四番めの 大伴の大納言は、家來どもを集めて嚴命を下し、かならたつ 龍の首の玉を取つて來いといつて、邸内にある絹、綿、

錢ぜにのありたけを出だして路用ろようにさせました。ところが家來けらいたちは主しゅ
 人ゆじんのおろか
 人の愚おろかなことを謗そしり、玉たまを取りとに行くゆふりをして、めいゝの
 勝手かつてな方ほうへ出でかけたり、自分じぶんの家いへに引き籠ひこもつたりしてゐました。
 右大臣うだいじんは待まちかねて、自分じぶんでも遠とほい海うみに漕こぎ出だして、龍たつを見みつ
 け次第しだい矢先やさきにかけて射落いおとさうと思おもつてゐるうちに、九州きゅうしゅうの方ほう
 へ吹ふき流ながされて、烈はげしい雷雨らいうに打うたれ、その後のち、明石あかしの濱はまに吹ふ
 返かへされ、波風なみかぜに揉もまれて死人しにんのようになつて磯端いそばたに倒たふれてゐ
 ました。やうゝのこと、國くにの役人やくにんの世話せわで手輿てごしに乗のせられて
 家いへに着つきました。そこへ家來けらいどもが駈かけつけて、お見舞みまひを申まをし
 上げると、大納言だいなごんは杏すもゝのように赤あかくなつた眼めを開ひらいて、
 「龍たつは雷かみなりのようなものと見みえた。あれを殺ころしてもしたら、この方ほう

いのちの命はあるまい。お前まへたちはよく龍たつを捕とらずに來きた。うい奴やつどもぢや」

とおほめになつて、うちに少々しょうくのこ残のこつてゐた物ものを褒美ほうびに取とらせました。もちろん姫ひめの難題なんだいには怖おじ氣けを振ふるひ、「赫映かくやひめ姫ひめの大おほがたりめ」と叫さけんで、またと近寄ちかよらうともしませんでした。

五番ごばんめの石い上そのかみの中納言ちゆうなごんは燕つばめの子安貝こやすがひを獲とるのに苦心くしんして、いろく人と人ひとに相談そうだんして見た後み、ある下役したやくの男をとこの勸すすめにつくことにしました。そこで、自分じぶんで籠かごに乗のつて、綱つなで高い屋や棟むねにひきあげさせて、燕つばめが卵たまごを産うむところをさぐるうちに、ふと平ひらたい物ものをつかみあてたので、嬉うれしがつて籠かごを降おろす合圖あひずをしたところころが、下したにゐた人ひとが綱つなをひきそこなつて、綱つながぷつぷつりと切きれ

て、運うんわるくも下したにあつた鼎かなへうの上に落おちて眼めを廻まはしました。水みづを飲のませられて漸やうやく正しやうき氣きになつた時とき、

「腰こしは痛いたむが子安こやす貝がひは取とつたぞ。それ見みてくれ」

といひました。皆みながそれを見みると、子安こやす貝がひではなくて燕つばめの古ふる糞くそでありました。中納言ちゆうなごんはそれきり腰こしも立たたず、氣病きやみも加くは

はつて死しんでしまひました。五人ごにんのうちであまりものいりもしなかつた代かはりに、智慧ちえのないぎまをして、一いち番ばん慘むごい目めを見みたのがこの人ひとです。

そのうちに、赫映かぐやひめ姫ひめが並ならぶものゝないほど美うつくしいといふ噂うはさを、時ときの帝みかどがお聞ききになつて、一人ひとりの女官じよかんに、

「姫ひめの姿すがたがどのようであるか見みて參まゐれ」

と仰せられました。その女官がさつそく竹取りの翁の家に
 向いて勅旨を述べ、ぜひ姫に逢ひたいといふと、翁はかしこま
 つてそれを姫にとりつぎました。ところが姫は、

「別によい器量でもありませんから、お使ひに逢ふことは御免
 を蒙ります」

と拗ねて、どうすかしても、叱つても逢はうとしませんので、
 女官は面目なきように宮中に立ち歸つてそのことを申し
 上げました。帝は更に翁に御命令を下して、もし姫を宮仕へ
 にさし出すならば、翁に位をやらう。どうかして姫を説いて納
 得させてくれ。親の身で、そのくらゐのことの出来ぬはずはな
 からうと仰せられました。翁はその通りを姫に傳へて、ぜひとも

みかど ことばにしたが、自分の頼みをかへさせてくれといひますと、帝のお言葉に従ひ、自分の頼みをかへさせてくれといひますと、「むりに宮仕へをしると仰せられるならば、私の身は消えてしまひませう。あなたのお位をお貰ひになるのを見て、私は死ぬだけでございます」

と姫が答へましたので、翁はびっくりして、

「位を頂いても、そなたに死なれてなんとしよう。しかし、宮仕へをしても死なねばならぬ道理はあるまい」

といつて歎きました。が、姫はいよく瀝るばかりで、少しも聞きいれる様子がありませんので、翁も手のつけようがなくなつて、どうしても宮中には上らぬといふことをお答へして、

「自分の家に生れた子供でもなく、むかし山で見つけたのを養つ

ただけのことでありますから、氣持ちも世間普通の人とはちがつてをりますので、残念ではございますが……」

と恐れ入つて申し添へました。帝はこれを聞き召されて、それならば翁の家にはほど近い山邊に御狩りの行幸をする風にして姫を見に行くからと、そのことを翁に承知させて、きめた日に姫の家におなりになりました。すると、まばゆいように照り輝ぐ女がゐます。これこそ赫映姫に違ひないと思し召してお近寄りになると、その女は奥へ逃げて行きます。その袖をおとりになると、顔を隠しましたが、初めにちらと御覽になつて、聞いたよりも美人と思し召されて、

「逃げてても許さぬ。宮中に連れ行くぞ」

と仰せられました。

「私わたしがこの國くにで生れたうまたものでありますならば、お宮みやづか仕へも致いたしませうけれど、さうではございませんから、お連れつになることはかなひますまい」

と姫ひめは申し上げました。

「いや、そんなはずはない。どうあつても連れつて行く」

かねて支度したくしてあつたお輿こしに載せようとなさると、姫ひめの形かたちは影かげのように消きえてしまひました。帝みかども驚おどろかれて、

「それではもう連れつては行くゆまい。せめて元もとの形かたちになつて見みせておくれ。それを見みて歸かへることにするから」

と、仰せおほられると、姫ひめはやがて元もとの姿すがたになりました。帝みかども致いたし

方がかたございませんから、その日はお歸りかへになりましたが、それか
 らといふもの、今まで、ずいぶん美しいと思つた人ひとなども姫ひめとは
 比べものにならないと思し召すおほめようになりました。それで、時とき／＼
 々々お手紙がみやお歌うたをお送りおくになると、それにはいち／＼お返事へんじを
 さし上げあますので、やう／＼お心を慰こころなぐさめておいでになりました。
 さうかうするうちに三年さんねんばかりたちました。その年の春とし先はるさき
 から、赫映姫かぐやひめは、どうしたわけだか、月のよい晩ばんになると、そ
 の月つきを眺ながめて悲かなしむようになりました。それがだん／＼つにつて、
 しちがつしちがつの十五夜じゆうごやなどには泣ないてばかりゐました。翁おきなたちが心しんば
 配いして、月つきを見るみことを止やめるようにと諭さとしましたけれども、
 「月つきを見みずにはゐられませぬ」

といつて、やはり月の出る時分になると、わぎ／＼縁先など
 へ出て歎きます。翁にはそれが不思議でもあり、心が／＼りでもあ
 りますので、ある時、そのわけを聞きますと、
 「今までに、度々お話ししようと思ひましたが、御心配をかけ
 るのもどうかと思つて、打ち明けることが出来ませんでした。實
 を申しますと、私はこの國の人間ではありません。月の都の者
 でございます。ある因縁があつて、この世界に来てゐるのです
 が、今は歸らねばならぬ時になりました。この八月の十五夜
 に迎への人たちが來れば、お別れして私は天上に歸ります。
 その時はさぞお歎きになることであらうと、前々から悲しんで
 ゐたのでございます」

姫ひめはさういつて、ひとしほ泣なき入いりました。それを聞きくと、翁おきなも氣違きちがひのように泣なき出だしました。

「竹たけの中なかから拾ひろつてこの年とし月つき、大事だいじに育そだてたわが子こを、誰だれが迎むかへに來こようとも渡わたすものではない。もし取とつて行いかれようものなら、わしこそ死しんでしまひませう」

「月つきの都みやこの父ちち母ははは少すこしの間あひだといつて、私わたしをこの國くにによこされたのですが、もう長ながい年とし月つきがたちました。生うみの親おやのことも忘わすれて、こゝのお二人ふたりに馴なれ親したしみましたので、私わたしはお側そばを離はなれて行くのが、ほんとうに悲かなしうございます」

二人ふたりは大泣おほなきに泣なきました。家いへの者ものどもも、顔かほかたちが美うつくしいばかりでなく、上じようひん品ひんで心こころだての優やさしい姫ひめに、今いま更さら、永ながのお

わか 別れをするのが悲しくて、湯水も喉を通りませんでした。

このことが帝のお耳に達しましたので、お使ひを下されてお見

舞ひがありました。翁は委細をお話して、

「この八月の十五日には天から迎への者が来ると申してをり

ますが、その時には人数をお遣はしになつて、月の都の人々

を捉へて下さいませ」

と、泣く泣くお願いしました。お使ひが立ち歸つてその通りを

申し上げると、帝は翁に同情されて、いよく十五日が来

ると高野の少將といふ人を勅使として、武士二千人を遣

つて竹取りの翁の家をまもらせられました。さて、屋根の上に千

人、家のまはりの土手の上に千人といふ風に手分けして、天

から降りて来る人々を撃ち退ける手はずであります。この他に家に召し仕はれてゐるもの大勢手ぐすね引いて待つてゐます。家の内は女どもが番をし、お婆さんは、姫を抱へて土藏の中にはひり、翁は土藏の戸を締めて戸口に控へてゐます。その時姫はいひました。

「それほどになさつても、なんの役にも立ちません。あの國の人が來れば、どこの戸もみなひとりでに開いて、戦はうとする人たちも萎えしびれたようになって力が出ません」

「いやなあに、迎への人ややつて來たら、ひどい目に遇はせて追つ返してやる」

と翁はりきみました。姫も、年寄つた方々の老先も見届

けずに別れるのかと思へば、老とか悲しみとかの無いあの國へ歸るのも、一向に嬉しくないといつてまた歎きます。

そのうちに夜もなかばになつたと思ふと、家のあたりが俄にあかるくなつて、満月の十そう倍ぐらゐの光で、人々の毛孔さへ見えるほどであります。その時、空から雲に乗つた人々が降りて来て、地面から五尺ばかりの空中に、ずらりと立ち列びました。「それ來たつ」と、武士たちが得物をとつて立ち向はうとすると、誰もかれも物に魅はれたように戦ふ氣もなくなり、力も出ず、たゞ、ぼんやりとして目をぱち／＼させてゐるばかりであります。そこへ月の人々は空を飛ぶ車を一つ持つて來ました。その中から頭らしい一人が翁を呼び出して、

「汝翁よ、そちは少しばかりの善いことをしたので、それを助け
 るために片時の間、姫を下して、たくさんの黄金を儲けさせ
 るようにしてやつたが、今は姫の罪も消えたので迎へに來た。早
 く返すがよい」

と叫びます。翁が少し澁つてゐると、それには構はずに、

「さあく、姫、こんなきたないところにゐるものではありません」

といつて、例の車をさし寄せると、不思議にも堅く閉した格子

も土藏も自然と開いて、姫の體はするくと出ました。翁が留め

ようとあがくのを姫は靜かにおさへて、形見の文を書いて翁に渡

し、また帝にさし上げる別の手紙を書いて、それに月の人々

の持つて來た不死の藥一壺を添へて勅使に渡し、天の羽衣

を着て、あの車に乗つて、百一人ばかりの天人に取りまかれ
 て、空高く昇つて行きました。これを見送つて翁夫婦はまた一
 しきり聲をあげて泣きましたが、なんのかひもありませんでした。
 一 方勅使は宮中に參上して、その夜の一部始終
 を申し上げて、かの手紙と薬をさし上げました。帝は、天に一
 番近い山は駿河の國にあると聞き召して、使ひの役人をその
 山に登らせて、不死の薬を焚かしめられました。それからはこの
 山を不死の山と呼ぶようになった。その薬の煙りは今でも雲の中
 へ立ち昇るといふことであります。

青空文庫情報

底本：「竹取物語・今昔物語・謡曲物語 No.33」復刻版日本児童文庫、名著普及会

1981（昭和56）年8月20日発行

底本の親本：「竹取物語・今昔物語・謡曲物語」日本児童文庫、アルス

1928（昭和3）年3月5日発行

※拗促音の小書きの散在は、底本通りです。

入力：しだひろし

校正：noriko saito

2011年4月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

竹取物語

和田萬吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>